

近代教育が作り出せない人間像

—社会の転機と教育の転換に関する覚書—

所 長 矢 口 新

は し が き

この論文は、社会の転機と、人間の教育の問題を広い見地から考察したものである。新たな人間像の育成がさまざまな形で主張され要請されていることは、衆知のことである。しかしそれが単なる願望に終わって、具体的な姿をとって現実化しないのはどうしてであろうか。われわれの頭の中にこびりついている教育のイメージが近代 100 年の歴史の中でのものであって、今から以後未来へかけての人間をつくる教育ではないのではないか。それに気がつかないのは、あまり過去の惰性が強いからではないか。この際思い切って発想をかえて考えてみる必要があるし、それを現実のものとする努力をしなければ、今われわれが願っていることが単なるお題目に終わるのではないだろうか。そういうことを考えて、皆で議論したことをまとめたのである。

1

近代教育における学習の姿はどのような構造をもっていると言ったらよいであろうか。学習は教科ごとに行われる。そして教科ごとに教科書がある。それを使って教師が教える。大ざっぱに言えばまず、こういう構造だと言ってよいのではないか。教科、教科書、教師、これが現代学習の3本柱となっている。

まず、その中心である教科について考えてみよう。教科の集まりが全体としての学校の教育の中身をつくっているのだから、それらによって人間を育てることを考えているということになるが、教科を集めれば、人間を育てることになるのだろうか。そこには、何か人間のもっているものを細切れにしているという感がないでもない。簡単に言えば、教科のよせ集めで人間ができるのか。こういう疑問は現在は余り問題にされていないが、昔からかなり問題になっているのである。原理的な問題として言えば、人間の能力をどうして現在のような教科に分けて育てればよいと考えたのかという問題である。しかし教科の成立の経過から言えば、むしろ理論的というより社会と生活の実際的な要請から成立してきたと言った方がよい。外国でも日本でも、まず読み書き、そろばんが最初の学習の内容となったのである。それ以外の教科もその後また生活の実際的な要請を基盤にして加えられてきた。いわゆる地理、歴史、社会科、理科というような教科、道徳という教科、さらにその他の教科もみなそうである。そしてこの教科の種類は、初等教育、中等教育を通じてかわらない。

ところで、実際的な必要から成立した教科が本質的には何であったかということが問題である。つまりその教科の内容と考えられるものが教科書に書かれ、それを教師が解説するという形で学習が行われたとき、そこで育てられたものは実際に生活が要求するものになっているのか。こういう問題になると、これを理論的に評価するのはむずかしいのである。しかし、不足をなんとなく感じてきたのは確かであって、それを補う実際的な試みはこれまでにはさまざまな工夫がなされた。たとえば、教科を統合することが考えられた。合科とか、コアカリキュラムとか、郷土科などがそれであった。根底に生活の実際に必要なものは必ずしも、教科という分立したものでは身につけさせることはできないという事の実感があつたのであろう。実際的な知識というねらいがあつたと言ってもよいであろう。

教科自体をできるだけ実際的なものにしようという考え方もあつて、それは教科書以外の教材やまた学習の方法を考えるという方向の運動が生まれた。具体的に行われた運動は、体験教育とか、労作教育とか、直観教育（視聴覚教育）という実際的な運動であつた。

更に現在の教科以外の形態をもった内容、例えばエキストラカリキュラー、教科外活動が加わってきたのもそのあらわれである。クラブ活動によって教科の学習の形態以外の子供の全体的活動の場をつくらうというのである。

これらのものは、どれも近代教育の教科構造を転換するに至らずして、結局は、教育は現在のように受験戦争に突入している。学校教育の外側に 60 万もの学習塾が成立して、教科の学習は花ざかりなのである。

2

われわれはまだ本当にこの近代学習の中心となっている教科というものを疑つてみたことがない。そんなもので人間が育てられるかということである。しかし、本来教科などというのはそんな人間を育てるなどということではなかつた。もっと実際的なその時代社会に生活するに実際的に必要だと思われる事柄を身につけさせようとしたのである。およそ一般的にいつの時代も教育というのはそういう実際的な要請からおこる。たとえば、中世の武士は戦闘集団の成員たるために人を殺す行動力を身につける学習をしたのである。それが具体的に人間を育てることなのであつた。江戸時代の武士は政治の権力者の集団として為政者としての態度を身につけるために儒学の学習をさせられた。近代社会は商業から工業の発達によって生活を立てる社会となつて、それに必要なものを学習することになつたのである。近代文明は、科学を基礎にして成立しているのであるから、その科学を学習することが近代文明社会の生活者となる要件であると考えて、そこに教科が成立した。

教科はだから抽象的に言う人間のあり方というものを考えて、人間を育てようとして成立したのではなかつた。すこし極端な言い方をすれば人間などはどうでもよかつた。何よりもその時代時代にその社会をうまくわたる実際的な生活技術を与えることだつたと考えてよい。それは、現代社会を見てもよくわかるであろう。近代産業国家の中でうまく世渡りをする人間が生まれている。その最上層にいる人々はいわゆる政界、財界の人達、官僚といった人々である。それらの人々はかなりうまく世渡りをしている。よいこともするが悪いこともしてうまくバランスをとっている。その人々は近代教育の生み出した生産品のモデルである。近代教育は成功しているというべきであろう。そして、また多くの庶民がそういう

人物になりたい、つまり昔流の言葉でいえば、立身出世をしたいと考えている。これもまたもつともであり、人々がそれを願って教育をより高く望むというのも教育の普及という点からいって喜ぶべきことである。社会の人々すべてがそれを願うということなら近代教育はすべての人々に望まれていてそのあり方は大成功であるというべきではないか。教育を求める人の要求はエスカレートして、そのために受験戦争、学習塾とますます需要がふえるのであるから近代教育はうまくいっていると考えるべきなのである。

こまるとすれば、教育の容れものが人々の要求に応えられないということであろう。大成功のかけに意外な落とし穴があったのである。

3

教科によって人間が育てられるかという問題は近代教育の世界においてはまだ本格的に提出されてはいないのである。それは人間を育てることが本格的に問題になっていないということである。このように言うと意外に思う人もあるかも知れない。しかしそれは事実なのである。

それは人間を育てるなどということが、すこし抽象的でわかりにくいこともある。つまりそれは観念の段階ではわからないこともないが、具体的な形としてはあらわれにくいのであろう。とくに学習の構造、前に述べた教科、教科書、教師という具体的な構造に対して何等かの手をうつような具体的なものとなってはあらわれていないのである。

それはつまり人間を育てるということが、具体的な形で本格的に問題になっていないということである。人間を育てるということが本格的に問題になっているのなら、多少は近代教育のこの学習の構造に変革があってもよいはずであるが、それは衆知の如くまだあらわれないのである。あるいは、また人間を育てるということが本格的に問題にされるなら、まず第一に現代育っている人間が、果たしてわれわれが育てようと期待した人間なのかという疑問がおこってきていなくてはならぬ。しかし、そういう疑問も本格的にはおこっていないのである。多少は青少年の非行というような不良品も生み出すという現象もあるが、それはまた特殊な現象であって、何も現代の学習を根本的にゆり動かす問題として意識されているわけではない。つまり、今やっていることを根本的に疑ってみるといふ雰囲気はどこにもないのである。ある種の現象は、現代教育を疑ってみるに足るものであるが、教育界はそういう思考はしないのである。前に述べたように教育は万々才である。どんどん学校はふえていく。発展しているのである。

もとより不十分な点は多々ある。それはしかしあくまで不十分に過ぎないのであって、現在の肯定の上に考えられていることなのである。たとえば視聴覚教材をもっと使えばよりよくなるであろう。教育工学的な手法を利用すればより能率的になるであろうというように考えられているのである。それはあくまでも現体制の延長の上にある問題なのである。

4

現代社会はガルブレイスなどが言う意味で産業社会といつてよいであろう。この産業社会は、一見豊かに見える社会をつくり出したが果たして豊かな社会だと言ってよいであろうか。多くの経済学者もい

うように、そこには転機がきているのではないか。そしてそこに根本的には、人間自体の生き方の転換の問題が生まれてきているのではないか。

別な言い方をすれば、現代社会とそこに生きる人間に、知らず知らずに病根がひろがっていて、気付かぬうちに重症になっていたのではないか。そこに人間の作り方を転換しなければならぬ問題があるのではないか。しかしそういう問題が、直接に、眼に見える形であられることはない。やはり一般の社会現象とおなじ形態でしかわれわれの眼にうつらない。そこにこの問題の把握のむずかしさがあるのではないか。

現代の産業社会は別な言い方をすれば、利潤追求社会と言ってよいであろう。ここでそういう言い方をするのは、ただ産業のみが利潤を追求するということを行っているのではない。一般的に産業のあり方は利潤追求集団の最も代表的なものと言えようが、それは現代社会では単に産業といわれる集団のみの性格でなく、ガルブレイスの言う意味で現代国家、社会の全体がもっている性格となっていると見てよいのである。そういう姿が最も浮き彫りにされたのは、最近の日本では、ロッキード事件であろうが、それは単に特殊な事件であったのではない。そういう形の利潤追求的行動は社会全体に横溢しているであって、政治経済、行政の分野更に教育界にまでもさまざまな形で浸透しているといっても過言ではあるまい。一般にそういう行動の仕方にわれわれは不感症になりつつあるといってもよいのである。しかしそれは必ずしもわれわれの前面にはっきり姿をあらわしてはいない。かなり数多くの公務員の汚職が摘発されて、それと気付くことはあっても、それでもまだ特殊なこととしか目にうつらない。それらが現代の社会のもつ根本的な病根のあらわれとはなかなかとらえられないのである。

そういうもののうちで比較的問題の根底にあるものまでを端的にあらわにしてきつつあるのは公害の問題ではないか。この公害の発生、原因、その対策の問題をめぐって起こっているさまざまな派生的問題は、われわれにその根の深さを、そしてその根底にある人間のあり方の問題を深刻に意識させるようになっていく。

われわれが豊かな社会をつくりつつあると思っていたそのことが、一朝気がついて見たら必ずしも豊かではなかった。その豊かさの一面が同時に貧しさではなかったのかという実感をはっきりと持つようになったのである。もちろん、まだその事をすべての人が深刻に自覚するほど、この事態をはっきりとらえているとは言えない。その意味では、この問題を認識する仕方には人々の間にはかなり幅があるということであろう。しかし、すべての人がそれをはっきり自覚し、感ずるようになるまで、この対策が放置されれば、それはわれわれの社会の滅亡につながるのではないかという確信をもっている人々もまたいるのである。

しかし問題は、具体的な事実として、結果として現れた公害の現象が、そのような意味をもっていると言うことのみではない。そういう結果を生み出すに至ったプロセスそれは数十年にもわたる長い期間のプロセスであるが—その間にそれをつくり出した人間もしくは人間集団の行動の仕方の問題である。それは一言で利潤追求の行動だというような解釈ではつかみ切れない現代社会に住む人間の行動の仕方の弱点をあらわにしている。

そういうものをわれわれは、とかく一括して価値観の問題というようなとらえ方をする。それは確かにそういった総合的なかつ根底的なものとしてとらえる必要があり、その言われる意味も、わからないことはないが、それにもかかわらず単に価値観というような単なるものの考え方としてとらえておいてよいものであろうか。

更にそういう価値観は単に公害をひきおこした直接の当事者のみのもっている価値観が転換すればよいという如きものではなく、それは被害をうける当の人たちも、また直接関係ないかの如き位置にいる傍観者の人々もみなもっているものであり何かの条件によっては、それらの人々がそのまま公害をつくり出す可能性をもって人々の心の底に根を下ろしている価値観なのである。だからこそ公害は日本の社会が全体として生み出したのであり、それを生み出したのは人々であり、人々の考え方や、具体的な行動なのだということを考えなくてはならないのである。それをもし、それはどこかの誰かが、あるいはどこかの集団のおこしたことにすぎないという如き認識ならば、そういう物事の見方こそがまた、公害の原因をつくり出しているということであろう。そして多分、現在の日本の社会の人々の中にはそれを他人事とみる人々が多いであろう。それこそが、あるいはそういう物事の見方が人々にあることが—それは社会の連帯とか、社会と個人との具体的関連的存在について自覚をもった行動の稀薄性とでも言ったらよいかもしれない—それこそが公害の共犯者なのである。多分公害というのはそういった様々な共同正犯的行動の結果、生み出されたものにちがいない。そして、それはまさに現代の利潤追求社会のもっている伝統的な行動の仕方なのである。

また次のような事例を考えてみよう。公害による損害補償が行われる。ある場合には、たとえば産業の生み出したヘドロのために、漁業が不振に陥ったのを補償するという形のものがある。これは二つの利潤追求団体の間の衝突の問題として考えられるが、これは利潤追求社会の伝統的思想の中の問題であるにすぎない。しかし都留重人氏（『日本経済の転機』などにくわしい）などが度々指摘するように、その土地の住民が失った海岸の白砂青松という景観や自然の美、健康性に対する補償というのは果たして成り立つのか。しかしこれは実は住民自体も、そういう公害の進展に対してあるところまでは敏感に感じなかったことなのである。健康を直接おかされることになって気がつくといったケースは多いが、その前に自然の美や、自然のもつ健康さや、自然のもつ摂理を身体で具体的に感じとる能力を失っていたのではないか。そういうことが観念的に理解されても、実は鈍感にしか受けとれないので、健全な人間としてそれに反応する力を失っていたのではないか。それが利潤追求的事業によって破壊される状況に対しておかしい事柄として感ずることができないような誤った観念が形成されていたのではないか。あるいはそれを感じても、それが鈍感であってそれに対する具体的な社会行動がとれないままに、取返しのつかない事態になるまで放置するという行動しかなかったのではないか。これもまた、極めて酷な言い方だが公害の共同正犯なのではないか。

自然の美しさとか、自然の健康さということに一体現代人はどれだけそれを実感する能力をもっているであろうか。現代社会の人々の能力としてこれをどう考えるべきなのか。これからの人間像を考えるときの大きな問題なのではないか。

われわれは、とかく未来社会を観念的に考えて大言壮語する。宇宙時代の人間像とか、原子力時代の人間像、あるいは簡単に21世紀の教育とかと言うが、現実に今生きて働いており、苦しみ、楽しんでいる人間、さまざまな生活の問題に具体的に反応し善と思って行動し、あるいは悪を行う人間の実際をどれだけ把握しているのか、またそこから未来を生み出そうとして現実を直視しようとしているのか。

現代の病んでいると言われている教育を本当に改めようとするなら、われわれの出発点はそこにあるのではないか。これこそがまさに教育問題の本質なのではないか。

5

さてもう一度教育問題にもどろう。現代人についての簡単な考察から速断するわけではないが、今は一つの試みとして考えてみるのである。すこしでも現代人に欠落しているものが明らかになれば、それを具体の学習の場のあり方の問題として考えてみることは、現代教育を改めるために必要なことではないか。

現代は一般に教育の問題が、教育の実質、つまり学習の場における学習者の具体の行動の仕方の問題を考えるのではなく、むしろそれは現在の肯定の上に立って、その運用つまり教育の制度、あるいは学校という容器のあり方の問題としてしか考えないのが通常である。それもまた先に述べた如く現代教育に対する人々のもっている肯定的な一般的通念から生まれているのである。現代教育は、その内部の問題を自らの力では告発出来ない状況にあるのである。それが社会の未来に悪い影響を与えなければよいけれども、そうではないのではないか。

一体現在の教科、教科書、教師という三本柱による学習は、先に述べた現代のもっている人間の問題に対してどのように答えられるであろうか。

現代人が自然の破壊に対して鈍感であるということはどういうことであろうか。また利潤追求によって他人の人間的存在を破壊することに対して恥ずることのないという人間のあり方は、どのようにして形成されて来たのか。それが学習の実質と何等かの関係をもっているのではないか。学習指導要領には知識、技能、態度の三つの目標をいたる所にかかげているが、学習の具体の場で学習するものは果たして何を身につけているであろうか。デューイは、本当に学習していることは、学習者がやっていることすべてに関係しているということを言っている。つまり教科書によって、その中の知識を解説されて、それを覚えるということが学習者のやっていることならば、学習者は、やっていることをつまり観念をうけていることを学習として身につける。やらないことは身につけないのである。教科書に書かれてある言葉は、解説によって体験することはできない。そこに自然の美しさが書いてあろうと、自然を愛することの大切さが書いてあろうと、それは行動によって実感しているわけではない。のみならず、それが言葉でわかっていることが、すべて本当にわかっていることと錯覚をするような行動をしていることになる。これは結局真実を喪失して、しかもそれを保有しているかの如き錯覚的人間を生み出す。それが学習者がやって身につけていることなのである。

教師が教科書の単なる言葉をどれだけ補うことができるかという問題も、考えてみてよいことであろう。しかし教師は、はじめから教科書の解説者として育てられているのである。教師が教科書をつくるのではない。教科書は、別の誰かによってつくられている。それは教えるべきことがきまっていて、それによって作られたものだというように教師には受けとられているのである。だから教科書に何か補うことを考えることはない。

教師は目前に居る学習者が何ができ、何ができないかを見る姿勢を持たない。それよりも、教えるべきことと決められたことを覚えたかどうかに関心があるのである。否それしか関心がないのである。だから学習者がどういう考え方をするのか、その考え方がどういう性質のもので、どういう問題をもっているかということには目が向かない。教師は学習者の記憶したことを教科書と答合わせをすることに一番精力を注ぐのである。

更に不利なことは、教師は満6才に学校に入って、その壁の外へ終生出ることのない人々なのである。その意味では本当は現代社会の生活者ではないのである。体験したこと、知ったこと、考えたことは教科書の外に出ることがないといってよいであろう。そういう教師は一種のロボットに近い存在なのではないか。それは抽象的な言葉を伝えることしか頭に浮かばない。生活の実感、生活の態度といったものをどうしてもたせるかが考えられない存在になっている。

こうして、現実には教科、教科書、教師という要素でつくられた学習の場では、本当の意味で真実を貫いて生きる生活者ができる可能性は全くないというべきであろう。

自然を愛し、自然を守る姿勢は、自然を自分が育てあげるといような場に置かれなくては出来上がらないであろう。自然は美しいという言葉を理解したということでは、自然を守るという行動にはならないのである。見ているだけではだめなのである。守るとい行動によってのみ守る姿勢は育つのではないか。

6

自然を守るというのは言葉ではない。いわゆる頭を使い、身体を使い、あれこれ気を使って、時間をかけて自然は守られるのである。そういう自然を守り育て、美しさを保持する行動には苦労もあり、楽しみもあり、喜びもあり、悲しみもあるのであって、それは言葉でいう自然を守るということとは違うことである。

自然を守り育てるとい行動は、そういう意欲をもつべきだ、そうしなければならないなどという言葉によっておこるものではない。そういう言葉を教えられて、そういうことを知っているということ、おこるものではない。そういう意味では一般に言われている知識というのは行動の原動力にならないといべきであろう。

自然を守るという行動をするものに対しての自然は、行動者にとってははじめから守るべきものとしてそこにあるのである。それはただ美しい自然として見られているのではない。それは行動者と何等かの意味で強くつながっているというあり方であるのである。だからもし外からこれを破壊するものがあるらわれれば、それに対して抵抗をするものとしてあるのである。たとえば自分がきれいに掃き清めた庭に誰か心ない人がごみを捨てて行けば、憤りを感じるのである。それは自分とつながった庭なのである。自分のつくった世界でこうあれかしという意欲の表れとしての庭なのであって、単なる土の上に木の植えられたものではないのである。そういう自然と人間とのつながりが、人間に自然を守る行動をひきおこさせるのである。

自然をただ見るものとしてのみとらえている人間は、自然を本当に守ろうとしない。それはただ山に登り、海に遊ぶ人々によって山や海がよごされるという事実があることによっても明らかであろう。しかし海や山を自分達の力で清掃をしてそこに快い海や山をつくり出した人間は、人々がそれをよごして行くことをだまって見ていることができない。よごせばせつせとあとから清掃して行く行動がおこるのである。

自然を守るというようなことはこういう人間の営みとしてあるのである。自然に対する姿勢を持った人々が育てられて来なければ自然を守ることは出来ないといべきであろう。

現代は山や海の清掃をするということも、清掃する人々をやとってするということになっている。それで自然の美しさは守られたと考える人がいるかもしれない。しかしそのことは本当に自然を守っているのではない。その清掃された場所をまたよごしてゆく人々は、それは労働者を雇うということによって清掃できるという考え方しかない。その人々の心の中にある清掃とはごみを片づけるという程度のことでしかないのであって、自然を守るなどということではない。その人々の心の中の自然は、自然の清掃をする労働者のそれよりも貧しいものであろう。そういう貧しい人々も口には自然を守ると言うのである。しかしその内実は自然を保護し育てるといふこととは全く似て非なるものであろう。そうしてその程度の貧しい心で自然を守ることができると考えていることがかえって恐ろしい結果を招くのではないか。

このように考えて来ると、自然を愛するなどいふことをただ言葉の上で教えているということでは、本当に自然を守る人間を育てられないのである。場合によっては言葉をあやつる心なき人間が生まれて、かえって危険なのである。

自然を保護すること、公害のことが社会科の教科書の中に取り入れられたから、それで安心という現代的な教育の発想にはある意味で危険なものがあるのである。人間を育てるといふことは教科の群によってなしうることなのであろうか。教科といふのはどう考えても、人間の心の実体、行動の実体に迫らないのではないか。

7

動物園に飼育されたライオンは、自然の中に帰してやっても、自分で生きて行く力をとりもどすことはできないといわれている。つまり野性を失ってしまうのである。われわれは形を見ているから、それをライオンと思っているけれども、本当はライオンの形をしただけものを見ていることになるのかも知れない。

野性のライオンは家族的な行動をして、獲物をたおすときなどは、5、6頭で共同動作をする。リーダーのライオンが目をつけた獲物をみんなが追いかけるのであるという。こういう行動力はどこから身につけて来るのか興味深いことである。

動物園のライオンは料理された肉を与えられて、のんびんだらりんとして生きているけれども、それはただ生きているにすぎないのである。野性を失ったということは、言いかえればライオンとしての行動力を失ったということであろう。たとえばわろいが、現代の学校の生徒たちも動物園のライオンのように、料理された教科書という餌を与えられて、自らの力で自然や社会を探究するということをやらなくなってしまっている。人間社会の成長とか発展とかは人間としての野性、つまり自然や社会の中で行動して、その中から自然の力で法則を発見し、またそれによって自然を守り育てるといふ営みをして来たことによって、なしとげられて来たのである。

そういう行動によって現代の人間の環境はつくられているが、現代の学校の生徒は、学校という動物園に入れられてその結果を教科という形で細分化して、抽象的な知識として教科書に書きあらわし、その餌を食べさせられている。それで人間的能力が育つと考えているのは、動物園のライオンを飼育しているのと全く同様なことをやっていることにならないか。形は人間としての形をしているが、野性を

失って、本当は役に立たない人間になりつつあるのではないか。

現代は知識万能時代で、それが人間として最も重要であり、立身出世にもそれが一番大切だというような妙な観念が行きわたっているから一朝一夕ではなかなか考え方は改まらないであろうが、具体の生活の場におかれて行動することこそが人間の野性、つまり本当の人間の生きる力であって、それは知識以上に大切なのである。それを身につけることこそが学習として重要なのではないか。

知識とか理論とかと言われるものは、人間が自分の周囲にあるものごとに対決してそこで行動して、その行動の結果を整理してそれを言葉でまとめたものと言ってよいであろう。ガリレオが地球が動くのだということを主張したのも彼が行動の結果を整理したから自信をもって言うことができたのであって、自信の根源は行動以外の何物でもない。真の知識とはそういう彼の行動そのものとその自信の中にあるのである。それを言葉で人に伝えるという手段をとるから、その言葉が知識のように思われるが、言葉は形骸にすぎないのである。

現代の学校の教科は、その言葉だけをいじくり廻している。本当に行動してそれによって自然に対決していないのである。教師もそういう言葉という餌で飼育されているから、生徒にそういう餌以外のものを与えることができない。こうして、二代、三代と経過すると次第に行動力を失った化物的人間が培養されて、しまいには収拾がつかなくなるのではないか。

その根本の原因はどうも教科、教科書、教師という現代教育の3本柱にあるように思われる。

8

自然を守り育てるということは、教科の中で、たとえば社会科の教科書を講読することによって育てられるということではないとすると、新たな学習の場をつくり出さなければならないことになる。そういう学習の場は、むしろ行動の場と言った方がよいであろう。現代は学習の場という、とかく教科の学習のイメージが頭に浮かんで、行動を育てるような行動の場が考えられないようになってしまっている。そういう概念から脱却して新しい行動の場を生み出すことは容易なことではあるまい。現在の体制の中ではガッチリとわくが出来てしまっていて簡単にそういう新しい場が位置づかないのではないか。いわば水と油なのである。

そういう行動の場は、たとえていえば動物園のおりの中にはつくれないのである。野性の場でなくてはならないのである。ということは社会という生活の場、人間の実際の生活の場にそういう場をさがさなくてはならぬということである。

そう言えば現代の子供は社会から隔離されてしまって、伝染病の病棟の中にいるような扱いを受けている。過保護というけれども、保護といえるのかどうか、化物扱いといった方がよいのではないか。もっと大人の社会の中へ入って、街角がよごれていれば清掃をするということをやってよいはずである。いなそういう社会の一員としてやるべきことをやるような姿勢を子供の頃から育てなくてはならないのではないか。子供は街で遊んで道路はよごしほうだいというのでは、彼等が大人になって、道路に煙草の吸がらを捨てほうだいという行動をするのも当然ではないか。そういうたれ流しの行動は一人一人の心の中に住みついている。それが集団的に行われれば、公害となる。いな一人一人でも皆公害をまき散らしていると考えてもよいのではないか。

現代は清掃などということも、人を雇ってやるという考え方になって来ている。大きなビルなどは皆清掃会社が清掃することになって、ビルの中の働く人は専らよごしていさえすればよいという雰囲気になって、それを合理化と称している。学校などにもそういう考え方は影響して来ている。それは人間が次第に動物園の飼育動物に近づくことになっているのではないか。

学校の校庭の掃除でも、これを本気になってしつづけると、さらに発展した行動になるのである。校庭の掃除は恐らくそれだけにとどまらないであろう。清掃することが快いことであるという実感が湧くと、それは次第にひろがって、裏庭にも及ぶかもしれない。それは校門の外の道路にも及ぶかもしれない。人間の心とはそういうものである。昔学校で罰としての掃除当番というのがあったが、そういう考え方が墮落のはじまりなのであった。禅僧が毎朝掃除をして心を清掃するということに、人間が自分の環境を美しくすることは最も人間的な姿勢なのである。

以上は一つの例であるにすぎないが、公害に対する現代人の姿勢をつくるということはそういう所からはじめなくてはならないのである。公害は何よりもまずわれわれの行動によって克服されなくてはならない事なのであって、ただ眺めて理くつを言っていればよいものではないのである。誰かが公害をおこし、自分はそれを非難すればよいという如き単純な思想では公害はますます大きくなるであろう。

現代は公害は企業がおこすという通俗的な考え方が極めて強い。それは確かにその通りであるが、ただそれだけではないのであって、企業といえども人の集団であって、その人の集団が自然を守るセンスをもつ人々の集団であれば、必ずしも公害をおこすとは限らないのである。その点では利潤追求という一点のみで行動し、自然を守るセンスを持たない人間は一種の化物なのではないか。現代人の化物的性格が公害を生み出すとも考えられる。現在自然をよごすことが当たり前になっている。街の中にちょっとした川があれば、それはたちまちどぶ川となる。そしてそれをきれいにするには労働者をやとえばよいと考える。

それが人間のなす当たり前前の行動のようになってきているが、これだけ多くの人間が都市をつくって住むようになったら、そういう川をよごすセンスの人々の集まりでは真の清掃はできないのである。こうして都市は人間の住む場所ではなくなってしまうであろう。本来の自然の中の人間に立ちかえって行動できる人間にもどらないと、それは人間の滅亡につながるのである。そういう欠陥が象徴的にあらわれたのが、多くの公害現象ではないか。失われたセンスをいかにして取り戻すのか、新たな人間形成の方式が必要になっているのではないか。そしてそれは教科の中ではできないのではないか。

美しい自然を実感としてもち、それを守りつづけ、それを破壊する行動を排除するという主体的な姿勢がなくてはならないのであって、ただ眺めていて、どうすればよいなどということを考えるのではない。毎日の営みの中に、自然を守る営みが生きていくようになるのであろう。そういう生活を子供の頃からもち続けさせ、その姿勢を定着させることが教育の仕事なのである。それこそが主体的に自然を守る人間をつくるということであろう。主体的というのは、そういうことが定着した姿勢なのであろう。

9

以上公害の問題を例にとって、この問題をひきおこしたのも人間であり、それと対決し克服してゆくのも人間であることを考えて、そこからいかなる教育問題が引きおこされるかを考察してみたのである。

これは極めてささやかな考察であって、公害に関しても、ごく一端をとりあげてその人間的教育的側面を考えてみたにすぎない。しかしそれでも、現代の教科、教科書、教師の体制がむしろ公害的人間を生み出した地盤となっているのではないかというように思われる。ましてや公害を克服する人間となると、現在われわれのもっている学習構造では形成できないのではないか。

このようにして現代の問題である汚職的人間像を考えてみるのも大切なのではないか。そうしてそれらを克服する教育、学習の構造を考えると、どうも現代の教育はもはや今後を背負う人間を育てる構造をもつものではないような気がするのである。

現代の教育が忘れてしているのは、生活が形成するということではないだろうか。知識と技術というものを生活の場から抽出して与えればそれでよいという近代的思想は問題であって、人間は具体の場で責任をもって行動する場におかれ、そこではじめて具体の行動の感覚を身につけることができるのではないか。

そういう生活の場での行動を忘れた教育は、人間をロボット化し、リースマンがというような孤独な群衆を生み出して行く。それは社会の分裂につながる。そういう意味で、現代の学習は場のダイナミクスの中で人間の形成を忘れた、抽象的観念の産物としての学習である。そこでは真に人間的なるものが生きた具体の人間が不在になっている。それでは責任のある行動がとれる生きた人間が生まれない。コールマンが、学校は知識を与えることをやめて、生産活動の場、創造活動の場、社会的活動の場、共同生活の場となることに努めるべきだというのは一つの見識であろう。教科の学習は根本的に変革されねばならぬことになるのであろう。言いかえれば、生活を通じて生活することを身につけながら、より幅の広い生活圏へとひろがり行き、より複雑な行動の場を展開することが新たな学習システムの開発の方向であろう。その事例の一端は紀要本号掲載の報告にも述べられている。また企業内教育の体質改善もその事例である。